

# 構成吟

『伊達を愛した偉人・文人の詩歌で綴る

我が麗しきふるさと』詩歌集



令和6年11月11日

大崎市地域交流センター

「あすも」ロビーコンサート

## ① 萱野の雨

伊達政宗

音もせで 萱野の夜の 時雨きて  
袖にさんさと 濡れかかるらん

## ② 駒嶽夢雪 白鳥省吾

りっぼう  
栗峯の残雪は天馬の影なり 仰ぎ見る農人は播種の候  
夕陽花の如く雲燃えんと欲す 山村の炊煙は泰平を歌ふ

## ③ 白鳥の舞 佐藤月風

りつぎん  
栗山映し出す伊豆の沼 白鳥来たり遊ぶ陸路の洲  
忽ち霧煙に散じて旭日登れば 東天に比翼瑞鳴悠なり

## ④ 気仙沼 落合直文

ひとつもて 君を祝わん ひとつもて  
おや 親を 祝わん 二本 ある松  
ひとつもて 君を祝わん ひとつもて  
親を 祝わん 二本 ある松



⑤ 金華山

大槻磐溪

大濤壁を衝き 碎けて龍となる  
余勢驚奔して 万場従う  
是れ神靈の東極を 鎮する莫らんや  
天を撃ぐるの 石柱中峰に立つ

⑥ 鳴子峽観楓 大林昭雄

兩岸万株 楓葉紅なり  
妍を争い秋は染む 碧溪の中  
仙郷塵外 斜陽淡し  
鳴子燦然として 錦繡の叢

⑨ 春

土井晚翠

花を待つ 青葉の山の 春雨の  
降るとも見えず うち烟りつつ  
花を待つ 青葉の山の 春雨の  
降るとも見えず うち烟りつつ

⑩ 蔵王山 佐藤雄岳

昔時火を噴き火口を残す  
山腹に奇岩怪岩多し  
紅葉霜秋て錦繡を晒す  
人を使って恍惚仙境に入らしむ

⑦ 『奥の細道』より「松島」の一節

芭蕉

抑ことふりにたれど  
松島は扶桑第一の好風にして  
凡洞庭・西湖を恥ず 東南より海を入れて  
江の中三里、浙江の潮をたたふ  
島々の数を尽して、歎ものは天を指  
伏すものは波に匍匐  
あるは二重にかさなり、三重に畳みて  
左にわかれ右につらなる  
負るあり抱るあり、児孫愛すがごとし  
松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹たはめて  
屈曲をのづから矯めたるがごとし  
其景色窅然として、美人の顔を粧ふ  
ちはや振神のむかし、大山祇のなせるわざにや  
造化の天工、いづれの人か筆をふるひ詞を尽さむ

松島や 松島や

鶴に身をかれ ほととぎす

鶴に身をかれ ほととぎす



⑧ 奥の細道より「塩釜明神」 松尾芭蕉

早朝塩釜の明神に詣づ

国主再興せられて宮柱ふとしく、

採椽きらびやかに、石の階九仞に重なり、

朝日朱の玉垣かがやかす。

かかる道の果て、塵土の境まで、

神靈あらたにましますこそ

わが国の風俗なれと、いと貴けれ。

神前に古き宝塔あり。

鉄の扉の面に「文治三年、和泉三郎寄進」とあり

五百年來の佛、

今、目の前に浮かびて、そぞろに珍し。

かれは勇義忠孝の士なり。

佳名今に至りて 慕はずといふことなし。

まことに「人よく道を勤め義を守るべし。

名もまたこれに従ふ。」といへり。

日すでに午に近し。船をかりて松島に渡る。

その間二里余、雄島の磯に着く。

⑪ 白石川桜花 大石朔風

蔵王遠く望む 古城のほとり

万朶の桜花 日に映じて妍なり

残雪皚皚として 碧落に懸り

紅英片々として 清川に散ず

頻りに小径を通る 観遊の客

遍く長堤を占む 美酒の筵

坐ろに愛す春光 随所に好し

佳期樂しみを 恣にして転陶然

⑫ 山居 国分青厓

寂寥たり 塵外の境

深く掩ず 竹簡の扉

水有りて 月來たりて宿し

風無くして 花自ら飛ぶ

端居物化を觀 靜坐禪機を悟る

日び 白雲の侶となり

去きて尋ぬ 春間の薇



港 入江の 春告げて「流るる川に 言葉あり」  
 燃ゆる 焔に 思想あり「空行く雲に 啓示あり」  
 夜半の嵐に 諫めあり「人の心に 希望あり」  
 空のあなたに わが舟を「導く星の ひかりあり」  
 夕月波に しづむとき「暗闇よもを 襲ふとき」  
 沖の汐風 吹きあれて「白波 いたく ほゆるとき」

大きな声を出して  
健康にストレス解消に


思い切り声を出して  
みませんか…!?

気分すっきり  
爽やかに

きっと心が洗われます!

詩を作られた人の  
喜びや悲しみ  
或いは  
苦しみや楽しみを  
声に出して詩して

その感動を心で表現します!



# 古川銀杏会

公益社団法人 日本詩吟学院認可

# 宮城岳風会



仙台市青葉区本町 3-1-17-203

TEL 022(346)9365